

広島県での被災地ボランティアです。まだメディアにも取り上げられていない、支援の手が届いていない場所まで行って、復旧活動をしました。家の中に腰の高さにまで泥が入って、住人の方が家に入らずに避難所で泣いていた。それを見た子どもたちは朝5時に起きて、初めて手にするスコップで土砂をかき出し、自分の体重の倍ぐらいある一輪車を一日中もくもくと押していました。そうした活動が1週間続きました。

伊原 ちょうどボランティア中に北海道で地震があり、生徒たちが「次は北海道も支援したい」と言ってくれました。だけど「大変だよ」と言ったら、しばらくして、「北海道被災地募金」を作ってきたんです。これには驚かされました。子どもたちがこんな純粋な心を持っていたのだと感動しましたね。

「依存させない」ための心がけ 実社会とのギャップも意識

伊原 入寮すると、まず「入寮プログラム」を受けてもらいます。最初は集団には入らず、1人部屋で自分と向き合うための時間を作ります。そこで、ほとんどの子どもが自分を客観的にみられるようになり、今まで当たり前だと思っていたことに感謝したり、親の大切さに気づいたりしていきます。そこから、自分と同じ境遇だったはずの人たちが、みんなと一緒に活動している姿に気づき、自然と自分も前を向き、改善に向けて自主的に動き出していきます。

そこから集団生活が始まっていきます。普段は起床から就寝までの時間割が決まっていて、日中の学習プログラムも組まれています。それぞれに個別の学習や就労計画があ

り、特に具体的な目標を設定させているのが特長です。振り返りでは「できた感じ」ではなくて、具体的に「何をどれだけ習得したか」までしっかりとチェックさせています。

通知書にあたるサポートの報告書もしっかり作成していて、これは保護者や教育委員会への提出資料、また在籍校の出席扱いのための資料として使ってもらっています。日常の成果はもちろんですが、その生徒がその日に何を食べたか、日々の活動内容や身体成長記録、健康状態まで詳細に記載しています。

児島 私たちは、卒業のタイミングを基本的に半年から8か月という目標数値で立てています。集団生活ではできることが限られていますし、ここでの生活が長くなると今度は社会との温度差が壁になってしまいます。ここでは、顔色が悪ければ「どうした？」と言われ、下を向いてれば「元気がないじゃん」と日々声を掛けてもらえる。でも、実社会でそこまで気にかけてくれる人はほとんどいません。

入寮後、ある程度の時期から私と伊原は子どもたちと距離を置き始めます。私たちに依存せず、ここを卒業して自宅に戻っても、自分のペースを崩さずスムーズに本来の生活に溶け込めるようにプログラムを設定しています。だいたい1か月、3か月と、区切りを付けて、意図的にそれが子どもたちにも伝わるようにしていきます。

「ヒーローを作り出す」のが 私たちの仕事

伊原 入寮希望は基本的に保護者からのアプローチが多いですね。口コミや在籍校からの紹介などもあります。最初に親御さんとお話をするのですが、そこでお子さんの状態

をヒアリングし、まだご家庭でできることがあればアドバイスをさせて頂き、経過観察となります。そのうえで支援が必要となればお受け入れをしますが、大切なのは保護者の方とじっくりお話をさせて頂き、しっかりと信頼関係を築けていることが前提となります。そこが理解し合えて、初めて具体的なスケジュールを組み、私たちがご自宅までお迎えに何うという流れになります。

児島 お子さんをお預かりする以上、私たちが責任をもって対応しなければなりません。ですから、子どもたちが安全で、健康で、快適に生活していける万全の環境を整えることを第一に考えています。充実した設備やプログラム、食事などはもちろんですが、一番大切なのは子どもをサポートするスタッフの配備です。

私たちの活動は、決して容易ではありません。日々全国各地から相談があり、支援が必要となればどこへでも飛んでいきます。寮の子どもたちも、突然、体調を崩したり、気持ちが不安定になったり、予定にない出来事が毎日のように起こります。スタッフは熱心に身を削る思いで対応していますが、ただ、だからといってむやみにスタッフを増やそうとは思っていません。誰でも良いわけではなく、学歴や資格を最優先することでもなく、本当に子どもが大好きで、優しさがあり、親身に子どもと接することができる人物。大事なのは人柄で、本当に信頼できるスタッフたちがサポートします。

スタッフ採用の応募も多いのですが、面接をしていると、私たちの活動が「人助け」や「救済」だと誤解している方がいます。そうした方の多くは、自分の役割が「正義の味方」や「ヒーロー」だと思っているところがあるんです。しかし、「ヒーロー」になるのは子どもたちのほうです。私たちの活動は「ヒーローを作り出す」こと。例えるなら私た

ちは「アンパンマン」ではなく「ジャムおじさん」側といったところでしょうか（笑）。

通信制高校在籍生の利用も 表情が見える関係になれば

児島 高校に在籍しながらセカンドスクールを利用する生徒もいます。多いのはやはり通信制高校です。もともと、私たちは基本的に特定の学校と連携をするつもりはありませんでした。以前、ある通信制高校から連携の話もありましたが、スクーリングの課題もあって難しさを感じました。しかし、実際に通信制高校に在籍している生徒からの問い合わせや、入学したもののスクーリングに来られない生徒がいて困っているといった学校側からの相談も増えてきました。私たちとしては、困っている生徒がいるなら助けたいし、できることがあれば協力したいという気持ちがあります。そうした様々なオファーを受けながら、私たちの活動の幅も広がり始めています。

例えば近所にある通信制高校さんがありますが、その学校は、支援が必要な生徒にセカンドスクールを紹介してくれるんです。非常に熱心な先生がいるのですが、そういった学校の様子や先生、生徒たちの表情がちゃんと見える状態であれば、信頼し合える関係が築けると思います。セカンドスクールを卒業して通信制高校へ進学する子もいます。私たちが幅広く関係を築き、子どもたちの進路も支援していきたいと考えています。

私たちの目的は子どもたちを幸せに導くこと。セカンドスクールは、その目的に向かう練習場のような空間であり、例えるなら「幸せの滑走路」なのです。



毎月4回ほど行われる特別イベントや農業体験、自立支援、就労支援プログラムなど様々な体験もある